

WLRAとその世界会議の動向について

○山崎 律子（余暇問題研究所） 高橋 伸（国際基督教大学）
川向 妙子（東海大学） 栗原 邦秋（余暇問題研究所）

キーワード： レジャー、レクリエーション、WLRA、WLRA世界会議
はじめに

日本の国際化が叫ばれてから、久しい年月が過ぎようとしている。最近では情報網の急激な発達により、政治・経済・社会・科学・研究などの分野において、その国際化が進んできた。しかしながら、レジャー・レクリエーションあるいは観光においての実践的側面での国際化は実現しているが、それらの研究分野における国際交流は、必ずしも進んでいないのが現状である。

本報告は、上記の問題をふまえ、レジャー・レクリエーションに関する国際組織としての世界レジャー・レクリエーション協会（World Leisure and Recreation Association—以下WLRAと略す—）に着目し、その概要と世界会議の動向を、参加の経験を基にして紹介しようとするものである。したがって、本報告の具体的目的は、①WLRA設立の経緯およびその性格の把握、②世界会議（第1回より第4回まで）の内容分析、および③それらの問題点と今後の課題への対応などである。

WLRA設立の経緯

International Recreation Association-IRA-（WLRAの前身）が正式に米国ニューヨーク州法に基づき、非営利団体として発足したのは、1956年10月3日である。理事として各国から35名が就任した。会長は英国パベンハム卿（Lord Luke of Pavenham）、総主事にはトーマス・リバーズ（Dr. Thomas E. Rivers）になった。日本からは、当時の日本レクリエーション協会会長加賀山之雄が理事および副会長として就任した。

このIRA設立に至ったのは、1952年、当時全米レクリエーション協会（NRA）の副専務理事であったリバーズが、熊本県で実施された全国レクリエーション大会に、NRAの代表として出席したことが始まりといわれている。

その帰途リバーズは、13か国を訪問し、各国の指導者とレクリエーションの考え方や将来の協力体制について話し合った。その結果、1953年には、NRAの一部門として、国際レクリエーション・サービス部が設置され、リバーズがその担当となった。その後も彼は各国を訪問し、レクリエーション分野における国際組織設立の必要性、交換プログラム、各国の中心組織設立の必要性などが確認された。

これらの情報から、1956年第38回全米レクリエーション大会開催時に並行して、国際レクリエーション会議開催がNRAによって提唱された。国際援助の一環として米国国務省も協力した。期日は1956年9月30日から10月5日、場所は米国フィラデルフィアのホテル・ベルビュー・ストラトフォードであった。会議のテーマは、「Creative Use of Leisure Time」であり、33か国から2,000人を越える参加者があった。日本からも西田泰介と松原五一が、日本レクリエーション協会から派遣された。

このように、IRAの設立は、米国の第2次世界大戦後の国際援助とNRAの強力な働き掛け、およびリバーズの献身的努力によって達成されたことが明らかである。

IRA設立後の主な活動

IRA設立後のその主な活動は次のとおりである。

- 1960年代・・・各国への指導者の派遣、レクリエーション・プログラムの紹介と推進、各国のレクリエーション協会設立のためのノウハウの提供と援助、ベトナム難民サービス、世界レクリエーション会議（大阪市）を日本レクリエーション協会と共催（1964）、国連 UNESCO でIRA を NGO 団体に認可
- 1970年代・・・レジャー憲章の制定、地域協会設立推進（ヨーロッパ・レジャー・レクリエーション協会設立-ELRA）、専門委員会設立（INTERCALL-INTERCALIX）、専門委員会中心の国際会議開催、Robert O. Wilder 会長就任（1972）、国際レクリエーション協会（IRA）の名称が世界レジャー・レクリエーション協会（WLRA）と変更（1973）、国際余暇研究会議（横浜市）開催に協力（1978）、Thomas E. Rivers 逝去（85歳-1977）、Tom and Ruth RIVERS 奨学金プログラム設定
- 1980年代・・・WLRA Bulletin が WLRA Journal に変更、事務総長 William Cunningham から Nelson Melendes に交替、ラテンアメリカ・レジャー・レクリエーション協会（ALATIR）設立、研究委員会設立、国際研究会議開催、事務総長 Cor Westland に交替・事務局もカナダ・オタワに移転、機関紙季刊 World Leisure and Recreation 発刊、経営委員会設立、第1回世界レジャー・レクリエーション会議開催（カナダ）
- 1990年代・・・WICE 設立、特別委員会設置（女性問題・HIV/AIDS 問題）、世界会議をほぼ定期的に行う（第2回～4回）、地域協会年次大会開催に協力、ワイルダ-会長逝去（1996）、副会長 Christine Quijano-Caballero（フランス・女性）が会長代行

世界会議の概要

第1回世界会議

「自由時間、文化そして社会」

- 期日： 1988年5月16日（月）～5月21日（土）
- 場所： カナダ・アルバータ州レイクルイーズ シャトール・レイクルイーズ
- 主管： アルバータ大学
- プログラム概要： 開会式、リセプション、晩餐会、総会、閉会式
シンポジウム、各委員会基調講演、研究発表分科会
コロンビア氷河バスツアーなど
- 参加国／者： 32か国・・・315名 日本から28名参加
- 研究発表数： 教育委員会関係 43題 日本から1題
研究委員会関係 52題 日本から1題
情報委員会関係 シンポジウム 日本から発題
経営委員会関係 シンポジウム 日本から発題
- 基調講演： 「レジャーとその環境」「レジャーと情報化社会-その夢と現実」
「自由時間と教育-今後10年の政治的課題」「レジャー：その意味」
「観光とレジャー：その将来」など

第2回世界会議

「レジャーおよび観光—社会と環境の変化—」
期日： 1991年7月16日（火）～7月19日（金）
場所： オーストラリア・シドニー市 キングスゲート・ホテル
主管： シドニー工科大学
プログラム概要： 開会式、リセプション、晩餐会、総会、閉会式
基調講演、研究発表分科会、分科会ミーティング
ワイン試飲会・ブッシュダuns、ハーバー・クルーズなど
参加国／者： 24か国・・・284名 日本から29名参加
研究発表数 16か国・・・109題 日本から3題
発表分野／題数： 国立公園・観光・野外レクリエーション分野・・・18
女性とレジャー分野・・・11
教育・トレーニング分野・・・9
研究分野・・・28
マネジメント分野や・・・15
観光分野・・・28

第3回世界会議

「レジャー・観光・環境—人類発展の課題—」
期日： 1993年12月5日（日）～12月10日（金）
場所： インド・ジャイプール市 ビルラ講堂／クラークアマー・ホテル
主管： インド・レジャー研究協会（ILSA）
プログラム概要： 開会式、リセプション、晩餐会、総会、閉会式
基調講演、研究発表分科会、委員会ミーティング
市内観光、インド芸能観賞会
参加国／者： 約30か国・・・約300名 日本から3名参加
研究発表数： 129題
全体で11分科会があり、それぞれの分野で基調講演と研究発表が実施された。

第4回世界会議

「21世紀に向けての自由時間と生活の質」
期日： 1996年7月15日（月）～7月19日（土）
場所： 英国ウェールズ州カーディフ市 パークホテル／市庁舎
主管： カーディフ大学、チェルテンハム&グロセスター大学
プログラム概要： 開会式、リセプション、創立40周年記念晩餐会、総会、閉会式
各委員会・特別委員会基調講演、各委員会ミーティング、研究発表分科会、シンポジウム
テクニクエスト・バスツアー、国立博物館リセプション
参加国／者： 約35か国・・・約350名 日本から12名参加
研究発表数： 33か国・・・228題 日本から2題発表
観光問題、女性とレジャー、高齢者とレジャーなど30のテーマに分かれた分科会で研究発表が実施された。

WLRAの推移および世界会議の特徴

WLRA設立から40年経た推移の特徴および現在まで4回開催された世界会議の特徴を概観すると次のようになる。

1) WLRA設立時の1950年から1960年代にかけては、米国による経済的・教育的・人的援助が、IRAを通して各国のレクリエーション運動に大きな影響を及ぼした。日本においてもフォークダンスや音楽などの分野の指導者派遣を受けた。またインド・コロンビア・韓国などの協会設立をみた。このようにIRAの1960年代の活動は、レクリエーション運動の中心的組織づくり、プログラムの充実期として特徴付けられる。

2) 1970年代は、国連との関わりをはじめ、時代の要請に応じて、ヨーロッパやラテン・アメリカなどの地域レクリエーション協会の設立、情報関係や指導者教育関係の専門委員会の設置、レジャー需要に応じた体制づくりなど、社会的認知を果たす時期であった。

3) 1980年代は、各種専門委員会活動が活発化し、それに従って専門化が進み、理論的研究の要請が強くなった。各国のレジャー・レクリエーション研究者が多く参加するようになり、国際的会議の必要性も高くなった。とくに社会学・社会心理学系の研究者が多くなったのも、この時代の特徴といえよう。

4) 1990年代に入ると、シドニー、ジャイプール、カーディフと世界会議も定期的を実施されるようになった。その内容も専門委員会を中心に展開されてきた。またマネージメント、エイズ問題、女性に関する問題などにも積極的に関わりをもつようになった。また観光と環境の問題も多く取り上げられてきた。

5) もともと国際会議開催の要請は1932年に遡る。ロスアンゼルス・オリンピック大会開催一週間前に第1回世界レクリエーション会議が開催されたのは周知のことである。以来この会議も3回で中断した。この会議の主要な人物は、やはりトーマス・リバーズであった。世界大戦後も1964年の大阪での会議や1980年開催のブリュッセルの会議などは、世界会議ではあったが、定期的を実施する運びにはならなかった。したがって現在では、レイクルーズの会議からが、WLRAとしての世界会議として位置付けられている。

6) 全4回の世界会議に通じていることは、テーマの設定が、時代の要請を受けていることで、それによって研究発表の演題も時宜を得たものとなっている。参加国は約30か国であり、300～400名規模の会議である。会議の公用語が英語であるためか、参加者も圧倒的に英語圏が多い。アジア諸国からの参加は現在のところ微々たるものである。また発表者については、開催国からの発表が最も多く、全体の約30%を占める。一般的に常時多く発表する国は、米国、カナダ、英国、オーストラリア、オランダ、ニュージーランドなどの諸国が挙げられる。

今後の対応と課題

1) 日本のレジャー・レクリエーション界において、WLRAの存在がいまだ認知されていない。したがって学会をはじめ関係団体の積極的加盟・協力が期待される。

2) 発表についても、外国語で行うため、日本人にとってはきわめて負担となることは事実であるが、国際理解・国際交流の立場から積極的な発表実現が望まれる。

3) アジア人の参加は少なかったが、それでも各国からの参加がみられた。21世紀を考える時、日本もこうした努力を現在から更に培うべきものと痛感させられた。